
俺の彼女はストーカー

加藤 大樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女はストーカー

【Nコード】

N5626F

【作者名】

加藤 大樹

【あらすじ】

主人公差間こうきのストーカー洋咲美春しかも生徒会長と付き合い事になった主人公の暗い過去など色々な事が描かれる「予定」恋愛小説ですもしよろしかったら読んでみてください

第一話 無視

俺、差間幸喜さつまこうきがこの学校、咲見高校に入学してから三ヶ月が経っていた、三ヶ月経ってこの学校は普通の学校より違ふところが少なからずあることを知った、一つ目は普通行事が普通の学校より多いと言う所それは後々説明していこう二つ目は生徒会選挙は六月に行われる事他にもまだあるらしいけどそれは後の機会に説明しよう。

朝携帯のアラームで普通に起き、普通に登校して学校に着くと俺の背中を「ドン」と叩いて現れたの小学校からのつき合いの俺の親友の可崎裕也かさきゆうやだった。

「おはよう〜こつ」

皆は俺の事をあだ名でこつと呼んでる。

「ああ、おやよう」

すると、周りがザワザワし始めた。

「なんなんだあれは？」

「ああ、あれわね今有名な人だよようきみはる洋咲美春さんだよほら、一年で初めて生徒会長になった、しかもかなり美人だし弓道部期待のエースだし気の強いというかクールなんだろうなけどそういう所もまたいいんだって、俺達と同じ中学校だったはずだよ。」

「え、そうだったんだ知らなかった」

そう言つて彼女を見てみると一瞬彼女と目が合ったが俺はすぐにそらしたすると可崎は。

「まあそうだよなお前中学の頃はな・・・それより今、目が合ってたよな何？お前何も思わないの??」

「綺麗だとは思うけど・・・俺には関係ないじゃん」
明るくそういうと。

「そうだよな〜」

そして時間は経ち昼休みになつて俺の周りに三人集まつてその三人とは裕也と堂本和木と、どうもとかずき崎山義正さきやまよしまさ三人ともいい友達だ。

~~~~~時間が経って放課後になった~~~~~

帰るしたくをして靴を出そうとするとその中に一通の手紙が入っていたその手紙にはこう書いてあった。

差間幸喜君へ

放課後体育館裏で待っています

洋咲美春より

俺はこの手紙というかラブレターを見て「はあ」とため息をついた俺は一度こういう手紙が一度来た事があったその手紙とは裕也と和木と義正がいたずらのために送った手紙だった、もちろん俺はそれに対してちゃんと復讐はした、そうため息の理由はまた変ないたずらしやがってつという意味だどうせ今日のことと裕也が考えたのだろう悩んだ結果無視する事にした、俺は心の中で「そこに何時間もいればいいんだ」そう思ってた俺は家に帰る事にした俺は今現在マンションで一人暮らし中をしていた金は親が仕送りしてくれているから生活はそんなに困っていなかった、退屈だから漫画を読んだと。

ピンポーン

ベルが鳴ったので出てみるとそこには誰にもいなかったどうせあの三人がピンポンダッシュしに来たのだと思いドアを閉めて来るのを待っていた。

~~~~~約三十分後~~~~~

「来ね」

だんだんイライラしてきて「電話して聞いてやる」そう思った俺は携帯をだし連絡しようとしたけど何か負けたような気がしたので止めた、そして風呂に入りテレビを見ていて十二時頃になって眠りについた………

~~~~翌日~~~~

朝俺はあの手紙の事で何となく嫌な気がしたので例の三人に聞いてみる事にしたすると三人とも。

「そんな手紙書いてねーしピンポンダッシュもしてねーよお前に復讐されてからお前には止めとこうと決めてるんだよ他の奴の仕業なんじゃないの？」

確かに三人とも今の時期は部活でレギュラーとりたいと頑張っていたからそんな事する暇ねーよなじゃあ他の奴か？そう思って考えてたらいつの間にか昼休みになっていた俺は購買に昼ご飯を買いに行こうとすると。

ガラガラガラバン

そうなって教室の扉が開かれたすると皆の視線が扉を開けた人物に視線が注がれるのが分かった、だけど俺はおかまいなしに教室を出ようとすると、ある一人の女性が近づいてきたその女性はさっき教室の扉を開けた張本人洋咲美春だった、すると彼女はいきなり俺の手をひっぱて。

「ちよつときて」

そう言っただけ俺を無理やり体育館裏に連れ出した、ん？体育館裏？まさか、俺は自分の行き着いた答えを素直に聞いてみた。

「まさか、俺に手紙書いたの君、本人？」

彼女はため息をついて。

「当然でしょ名前書いてあっただろうに」

「アハハハハハ」

俺は苦笑いするしかなかった。

## 第二話 告白

苦笑いしてる俺を彼女はにらんで。

「でさ何で昨日来てくれなかったんだ？」

ここで何と答えたらいいんだろう正直に言うべきか違う事を言うべきか、悩んでいると彼女は心を呼んだかのように。

「どうした？ハッキリ言ってくれ」

苦笑いを続けながら、彼女の言うとうり正直に言う事に言う事にした。

「いやさ、裕也のいたずらだと思ったんだよねアハハハ」

「なぜイタズラダト思っただ？」

一応俺は前に裕也がそういうイタズラをした事があることを説明すると。

「はあ〜そうだったんだそんな事までは調べてなかった」

うん、まあそういう反応するよな、ん？俺は少し疑問に思った事があった、「調べてなかった？」ということだ？

「ねえ、一つ聞いていいかな？」

「ああ、何でも聞いてくれ」

「調べてなかったってどういう意味？」

「そのままの意味だが、私は差間君の身の回りの事を調べさせてもらった」

「例えばどうやって？」

「どうやってって差間君の事を着けたり君の友人に聞いたりして」

堂々と言うな〜つまり彼女は俺の事をつけたりして調べたのかよ、ん？それってストーリーカーって言っじゃないのかな？あれ？俺はめんどくさい事を悩むのは嫌いなたちだったから考えるのはやめた、するといきなり彼女の顔が赤くなつて。

「私と付き合ってくれないかな？」

え？今なんていったのかなアハハハ……

「ごめん俺今耳がちょっと変みたいだからもう一回言ってくれないかな？」

「何回でも言っただけ好きなだけだから私と付き合ってくれないかな？」

え？つまり今学校で一番有名で男性にも女性にも人気ある人がなぜ俺見たいな普通な人間に告白してるんだ？なに俺の普通じゃないと言えばなんだろうああそういえば一つあったなたしよう人より反射神経がいいってとこだけだぞ……そんな奴になぜ告白するなぜなんだ……

「ねえ、俺のどこが好きなの、確か君との接点って言ったら同じ中学校ってぐらいじゃないのかな？」

すると、彼女はちよつと嬉しそうに。

「同じ中学校って覚えててくれたんだ」

アハハすみませ・・朝まで裕也に教えてもらうまで知りませんでした、罪悪感がある中、彼女は続けて。

「好きな所はすべてだ……」

照れながらもハッキリ言う彼女を見て悩みぬいたあげく尾俺は。

「アハハハそうなんだ……例えば」

そう聞く以外になんと聞けばよかったのだろう、言った後なのになぜか俺は悩んでいた、すると彼女は約十五分位だろうか俺があることに気になって話を止めなかったらどんくらい話してたのだろうか。

そう俺が気になった事があった俺の住んでる家も知ってたし俺の好きな漫画俺がよくカップラーメンばっか食べている事俺が家で猫がたまに来る事も知っていた他にも色々知ってたどうやって俺の食生活を知っているか聞いたところゴミをあさったらしい、さっきは深く考えなかったがやっぱりかの彼女は世間で言うストーカーと言う奴じゃないのだろうか？。

「ねえ、俺の事知りすぎじゃない？」

「だからさつき言っただけではないか調べたと」

堂々と言う彼女を見て俺はため息をつき。

「いやさ限度を超えてない、いいくらいだけと洋咲さんは・・・  
・ぞくに言うストーリーカーと言うやつなのではないのでしょうか？」

「そうかもしれないな・・・だがこんな事をしたのは君が好きだからやった事でやった事だから許して欲しい」

「許すのは別にいいんだけど・・・なぜそこまで俺の事が好きなんだ？大体俺の中学生時代を知っているなら俺を避けるだろう」

そう俺は中学生時代荒れていた高校生の不良とも何回も喧嘩した、俺は反射神経が普通の人よりよかつたため不良の攻撃など避けるのは簡単だった、俺は喧嘩では無敗だった、そのためか不良に憧れたりもした、今でもこの学校の三年生にさんずけで呼んでる人もいるぐらいだった、学校でも不良と知られていた皆は俺を避けていたそれでも裕也や他の一部の人は俺を避けないでいてくれた、最終的に皆とは仲良くなったのだがそのメンバーに彼女はいなかったはず。

「私は君に中学一年生の頃助けられた事がある、不良に襲われそうになった私を差間君が助けてくれたんだ、その時私は君に人目ぼれしてしまっただ、そして差間君は私にこう言ってくれたんだ「君綺麗だから変な奴に狙われると思うから何か武術的なやつたほうがいいと思うよ」だから私は柔道をならったり今は弓道をやったりしてる」

俺はそんな事を全然覚えていなかった不良にかつあげなどされてる人は助けたりした、俺はそれは良心でやったわけではなくただたんに喧嘩をしたかったからやった事なのにまさかそんな事で人目ぼれされると思わなかった、しかも俺が言っただけで彼女は柔道などをやっただけで事がすごいと思っただけで俺をここまで好きなら悪い気も知らないから俺は付き合うのがいいのだが、彼女と付き合うとなると色々面倒な事が会った「美春さんファンクラブ」と言うのも存在するくらい彼女はもてていた付き合うとなるとそいつらがうるさそうなの

で俺は悩んでいた、すると彼女は近づいて来て。

「どうなんだ？ いいか、だめかハッキリ言ってくれ」

俺は悩んだ結果

「ごめん」

そう言った

### 第三話 二人だけの秘密

俺は彼女の告白を断ると彼女は涙目になって。

「なぜだ？私は自分で言うのもなんだが顔も結構いい方だしスタイルだって・・・それとも性格がだめなのか君のためだったら性格だって直すし君のためなら死ねる・・・それなのになぜだめなんだ？好きな奴でもいるのか教えてくれ」

そっぴい終わると彼女は完全に泣いていた、俺はどうしようか迷ったが正直に言った。

「うん、確かに洋咲さんは綺麗だしスタイルもいい」

「じゃあやつぱり性格か？ならすぐにでも直す」

「そうじゃないよ、俺洋咲さんの事全然知らないし」

「なら、付き合ってからでもそんなのどうにでもなるじゃないか」

「うん・・・でもさ付き合ったら俺は君の事が好きになるかもしれないでもさっき言ったとおり洋咲さんは綺麗でスタイルもいい、だから周りの奴がほっとかないからも洋咲さんの彼氏が俺だなんて分かったら、あいつらがいつも追いかけてくるだろうし洋咲さんのファンクラブも黙ってないでしょそこがハッキリ言つてめんどくさい、もし洋咲さんの事が好きになったとしてもそれに対して対等な時間がかかる、俺はめんどくさがって時間に耐えられず君を振ってしまう可能性もある、大体俺みたいな人間は洋咲さんに俺は合っていないと思う洋咲さんはもつといい人を見つけるべきだよ」

俺はこの自分勝手な言い分に飽き飽きしながらもいっすけたさすがにここまで言うとな彼女は俺の事諦めるだろうと思ったし、面倒な事に巻き込まれるのは嫌だったから。

「なら、付き合ってくれたら私の事好きになるかもしれないって聞いたら諦めきれない、ファンクラブとかなんだか知らんがそんな奴らからは守ってやるだから私と付き合っで欲しい」

もしかして俺って墓穴掘ったのかな~~~~はあく好きになる可

能性あるなんて言わないほうがよかったな、俺は数秒悩んで。

「じゃあさ友達からってどうかな？」

「嫌だ」

即答だった。

「何で？」

「君はきき取ってないかも知れないが、君はハッキリ言っこの学校では女性に結構モテてるもしかしたら君はその仲の誰かと付き合ってしまうかもしれないから」

「は？・・・・・・なんで？」

俺は素直に疑問に思ったナゼ中学生の頃荒れていた俺がもてるんだ？

「君は私の時みたいにこの学校の生徒の多くを不良から助けたりしている」

「確かに助けたりもしていた、それがどう関係するんだ？」

「そういう事があると女の子は助けてくれた人に惚れたりしちゃうんだよ・・・大体知らなかったのか君の事はカッコイイとか噂になるほどだぞ」

そうだったんですか？全然知らなかったてか君が生徒会長って事も朝裕也に教えてもらわなかったら知らなかったぐらいだからな。

「話がずれたが私と付き合ってくれ」

「だからさっき言ったとおり友達からじゃだめなのかな？」

「嫌だ、本当にお願いだから付き合ってくれ」

「ごめん」

「なら強硬手段しかないな」

そういうと彼女は俺の事を押して俺はそこに倒れた。

「いてて、何するんだよ」

するといきなりのかかって来て俺の両腕をつかんで来て俺が必死に手を動かすと。

「無駄だ、私は君の腕の力はあまり強くないことを知っているそ

れに私は弓道部だ腕の力は自身がある」

この状況から見て俺は襲われそうになっているのでは・・ヤバイえゝゝゝどうしょ・・俺がそう思ってパニックしていると。

「君は責任感ある男だと知っているからな・・・フフフ」

何ですか今の笑いはまさか・・・・本気で。

「もしかして俺って襲われそうになってる？」

「当然だ」

素直に言うなゝゝゝヤバイぞさすがにヤバイ俺はいくら考えてもこの状況をどうにかする手は一つしかうかばなかったその策とは彼女と付き合うこと・・・そうだよ彼女と付き合ってるってばれなかったらいいんだよそうさ彼女みたいな美人が恋人になってくれるんだ最高じゃないか・・・そうばれなかったらいいんだ・・俺は心の中でポジティブに考えるんだそういい続けていた。

「はいはい参りましたいいよ付き合おう」

彼女は満面の笑みになって。

「いいの？」

「うん」

「ほんとに？」

「うんほんと」

「本当だな？」

「うん本当だって、だから離れてくれないかな？」

「そうかそうか付き合ってくれるのか、フフフじゃあ続きをしよ  
う」

なに・・・結局はこうなるのかいやだめだ何とかしないと悩んだ結果俺は。

「いや止めようよそういうことは付き合ってちゃんと年月がたつ  
するものだからさ止めようよ」

「いやだ」

即答ですかゝゝゝ「はあゝ」俺は軽いため息について効果あるか  
分からなかったけど。

「じゃあ、俺は洋咲さんの事嫌いになつて付き合つあのやめるよ」  
「分かった・・・その代わり私の事は洋咲さんじゃなくって美春って呼んで・・・・・・・・・・続きたかつたのに・・・・・・・・」

以外にすんなりゆうこと聞いてくれたな今度からめんどくさいことが起きたらこういおうそう心に決めた、最後に言つたことは聞こえないふりをした。

「うん分かつた美春じゃあ俺の事は好きに呼んでくれてかまわないから」

「うんじゃあ・・・・・・・・こう君って呼ぶから」

彼女がそういうといきなり俺の唇にキスしてきた、俺はとまどつて。

「え、っちょおい」

「フッフ今日はキスで我慢するよこれで私と幸福は恋人どうしだ」

「うん分かつたじゃあ一つ約束してくれるかな？」

「何だ？何でも言つてくれ」

「俺と付き合つてゐることは皆に内緒にしててくれな」

「うん分かつた・・・・・・・・二人だけの秘密だな・・・・・・・・ウッフ」

俺は美春がちよつとした妄想をしている間これからの事を考えるため息が出た。

### 第三話 二人だけの秘密（後書き）

もしよかつたら感想や評価是非お願いします

#### 第四話 どうする俺？

俺が美春と約束した後俺は美春と一緒に体育館裏で美春が作った弁当を食べていた・・やけに用意がいいなと思って聞いてみた絶対俺が告白を断らないって自信があつたらしい一応OKしちゃったけど俺一回断ったんだけどな・・・・。

「アーン」

そう言つて俺に玉子焼きを食べさせようとする美春に。

「いいよ、自分で食べるから」

美春は少し不機嫌そうな顔になって。

「だめだ、恋人同士なんだから私が食べさせてあげるんだ」

「あーはいはい分かりました」

「じゃあ、アーン」

俺はそれを素直に食べ、こんなところを美春ファンクラブの奴に見られたら、いくら俺でも殺されるなハハハ心の中で俺は考えていた。

「どうだ？おいしいか？」

「うん、おいしいよ」

「そうか、そうか、よかった」

笑顔になった美春を見てやっぱり綺麗なんだよな、本当に俺と付き合つていいのだろうか、俺はそう思ったが聞くのを止めた、まだ付き合つてから一時間と経つてないのに聞くのは何か気が引けるから。

俺が美春の弁当を食べて教室に戻ると俺と美春の事が噂になっていた。

「差間ちよつといいか？」

いきなりそういつて来たのは俺が全然知らない人だった見た目はごつごつしてていかにも強そうな感じだった俺は。

「すみませんけどあなた誰ですか？」

「ああ、そうだった言い忘れていた俺は三年の公崎陽平「こうさきやうへい」と言うものだ、ちなみに美春ちゃんフアンクラブのリーダーだ」

どうしよ、フアンクラブの人って事は俺が美春に呼ばれた理由聞きに來たんだろうな、ま、適当に嘘でも言っとくか俺はそう思っ  
て「俺が生徒会長に呼ばれた理由聞きたいんでしょ？」

「ああ、話が分かるな何で呼ばれたんだ？ま、まさかこ、告白されたんじゃないだろうな」

やっぱそうなるよな、てか顔が怖いですよそりゃあ分かりますよ学園のアイドルが俺見たいな反射神経がいいだけの普通の高校生に告白したとなったら怒りますよな、しかもフアンクラブのリーダーですよ。

「俺、実はよく遅刻しててそれに対して注意受けてたんですよ」

本当に俺は朝が弱いためよく遅刻していた、すると周りの人が盗み聞きをしてたらしく「そうなんだ」とか言う小言が周りから聞こえてきた、公崎さんも納得したらしく怒ってた顔が徐々に笑顔に戻ってきて。

「そうだったのか、それならいいんだそうだよ美春さんがお前見たいのに告白するわけないよな、奇跡でも起きなきゃありえないよなうん、うん早とちりしてごめんな」

そうですね、はあ、奇跡が起きちゃったんですよ、でもそう言ったら絶対殺されると思って俺は苦笑いをしながら。

「アハハ、そうですね」

そう言っ  
て自分の席に座ったその後も色々な人に美春とどんな話をしたか色々聞かれたよそれもうざいほど、どんだけ皆美春に興味あるんだよ、た、く。

、放課後、

俺は放課後になると皆が動く前に走りながら教室を出た後ろの方で「っち」「遅かったか」まだ美春と話した内容聞き足りないのか

よ、やっぱり走って教室出て正解だったなうんうん。

そのまま素直に帰って家で漫画を読んでいると。

ピンポン

ん？デジャブか？昨日も漫画を読んでいる時こんな事なかったけど、あれかいたずらされたんだったな。

「まあ、一応出るか」

そうつぶやいて窓を開けると、美春が立ってました。何で俺の家知ってた？って疑問に思ったけど、あーそうだったこいつストーカーだったね・・・アハハ。

「何のよう？」

「何の用って、私はこう君の恋人だからな、料理を作りに来たんだ」  
そうですか、てか、美春が俺の家来たの誰かにばれたら俺やべ・・・殺される・・・俺よ落ち着くんだまず、ここで話していると見つかる可能性があるからまず家に美春を上げよう。

「分かったから、早く俺の家に上げられよ」

「うん」

嬉しそうに笑うな、俺はあせてるのに。

家に上げて俺は。

「誰にもつけられてないよな？」

「うんつけられてない、一応私はこう君をつけて身だつけられてたら経験で分かるよ」

堂々と言うね、そうだよ美春はストーカーなんだからそういうのは分かるかひとまず安心だ。

「よし、私は料理を作るからこう君はテレビでも見ててくれ」

「ああ、分かった」

～～～約三十分後～～～

「こう君出来たぞ、今日はこう君が好きな料理二位のハンバーグだ」  
そう、俺が好きな料理をランキングにすると、一位は寿司、二位

がハンバーグ、三位が麺類です。

「それ、誰に聞いた？」

「覚えてないか？最近私が生徒会会長権限を使って前アンケートをとっただろ？あれで知ったんだ」

「あゝそういうのあったね、一つ気になったんだけど、どうして生徒会の会長何てなったの？」

「そりゃあもちろん、こう君の事を調べるたに決まってるだろう會長の権限を使ってこう君の事色々調べられたぞ」

「アハハ・・・そうですか、まあいいや飯食おう」  
「うん」

視線がかんじる・・・その視線とはやっぱり美春が俺の事をジーっと見ていたのだ。

「えっと・・・何？」

「なんでもないからさあ早く食べて」

「うん」

ハンバーグを一口食べるとかなりおいしかった。

「ど、どうだ」

「かなり、うまぞうん」

「そうかそれならいいんだうんうん」

美春の笑顔を見てやっぱり綺麗だなゝゝそう思って美春を見ていると。

「何だ？」

「いやさ、美春って綺麗だなゝゝと思って」

そう言ってからかってみると、美春の顔が真っ赤になって。

「あの、そのありがとう」

うゝん照れてる美春も可愛いでも・・・ストーカー何だよね、まあもいっか一応付き合ってるんだし。

だべ終わると。

「にゃあゝ」

そう鳴きながらベランダから俺がいつも餌をあげたりして猫が入

ってきた、猫の名前はくる理由は一応色が黒いからだ。

俺がくろをなでたり抱きかかえたりしていると、美春が小さい声で「いいな〜」

そう呟いてるのが聞こえたいいな〜ってまさか猫をなでたりしてるのが？

「膝枕ぐらいならしてやるぞ」

言ってみると美春が笑顔になって。

「うん、よろしく頼む」

美春が俺の膝に頭をおいて俺がなでて、五分くらい経って俺が美春に。

「そろそろ、離れてくれないかな？」

「……………」

返事がないただの屍のようだっておい。

「美春さん〜」

「スースー」

寝てるしどうしよ起こそうかな、でも気持ちよさそうに寝てるしどうする俺？

## 第四話 どうする俺？（後書き）

### 人物紹介

差間幸喜<sup>さしまこうき</sup> 身長171

体重57

反射神経がいいそのおかげで現在無敗

髪の色 黒 目の色黒

一人暮らしで、中学時代喧嘩ばかりしていたその理由は……

・まだ秘密って事でww

## 第五話 親公認！！

~~~~~前回までのあらすじ~~~~~

俺、差間幸喜の彼女、洋咲美春が急に家に来て美春がご飯を作って食べ終わり膝枕をしていたら寝てしまった。

さあ〜起きる気配はないしこのままほっとくのもいけないしさあ〜どうする俺？

以上前回までのあらすじでした〜。

さあ〜てどうしよ、よしゆすってみるか。

「お〜い起きろ」

「スースースースー」

起きないな〜、てかいい気持ちで寝てるな〜。

〜五分後〜

俺は考えた結果、美春を家に送ったほうがいい、そういう結論になったため。

「美春、お前のバックの中から生徒手帳見させてもらうな」

俺は、そういうと美春のバックの中を探して、無事生徒手帳を見つけました。

俺は生徒手帳に書いてある住所を見ると、一枚の紙が由香に落つこちたから拾うと。

その写真にはな、なんと俺が写っていました〜、って何で写真持ってるの？まあ、後で聞か。

「案外、美春の家近いな、てかどうやって運ぼう？う〜ん背中に乗せて行くのは無理っぽいから、お姫様抱っこか。

呟いて、俺は美春をお姫様抱っこして家を出て約十分くらい歩いていくと美春の家があった。

美春の家は見た感じ二階建ての一軒やだった。

ピンポン

ベルを鳴らすと。

「はい？誰ですか？」

女の人の声が聞こえてきた、多分美春のお母さんだろう。

「あ、あの差間と申しますが、美春さんが寝てしまったため届けに来ました」

「差間って、もしかして差間幸喜君？」

「え、はいそうですけど」

なぜ？俺の名前を知っているんだ？

「あ、そうなんだ待ってて今開けるから」

そう言つと、「ガシャ」とドアの鍵が外れる音がしてゆつくりとドアが開いた。

「あゝら、あなたが差間君？」

「え、あはいどうも」

「そう、私は美春ちゃんみつさきかすみの母親の洋咲和美です、よろしくね」

そう言つて出てきたのは、肩まである茶色い髪かみの美春のお母さんだつたそれを見て俺は。

美春はお母さん似だな。

「あ、はいどうもよろしく」

「それで美春ちゃんを送つて来てくれたんだ？」

「はい」

「じゃあ美春ちゃんを部屋まで運んでくれないかな？」

「はい、分かりました」

美春のお母さんについていき美春の部屋に着くと。

「美春ちゃんの部屋ここだから、寝かせといてね、私はリビングにいるから」

そういつて、リビングに向かつていつてしまう。

俺は言われたとおり美春の部屋に入つて周りが見えないから電気をつけ、美春をベットに寝かせようとする。

「な、なんだこれは」

一瞬目を疑った、な、なんと抱き枕に俺の顔写真が貼ってあったのです。

あゝ忘れてたこいつストーカーだったな。

俺は美春をベットに寝かせて部屋を出た。

リビングに向って、リビングのドアを開けると、そこには、美春

のお母さんに、美春のお父さんと思える人と、妹と思える人がいた。

「あ、美春を寝かせてきてくれたのね」

「あ、はい」

「君が幸喜君か、紹介遅れたね美春の父の洋咲和木ようさくわきです。」

声は低くて

「どうも、差間幸喜です、あの一つ質問していいでしょうか？」

「ああいいともなんだい？」

「何で俺の名前知ってるんですか？」

「なぜって娘の彼氏の名前ぐらい知ってて当然だろう」

「は？今このお方なんていいました、娘の彼氏の名前くらい知って当然？俺達が付き合い始めてまだ一日も経ってないのに何で知ってるんですか？」

「ちなみに俺達が付き合い始めたって言うてましたか？」

「高校始まってすぐだよ」

なに〜〜〜〜、美晴は何か予知能力でもあるんですか？誰か俺の疑問に答えてくれよ〜〜〜〜。。。。。。。。

はあゝ明日美春に聞くか。

「アハハハ・・・・・・そうですか」

「それで、この子は美春の妹の洋咲奈美ようさくなみ、ほら奈美挨拶しなさい」

「洋咲奈美です・・・・・・中学一年生ですよろしく」

「うん、よろしくね」

「では、俺は美春さんを送ったので帰らせてもらいます」

すると、何か美春のお父さんが残念そうにして。

「もう少しいたらどうだい？というか美春が起きるまでいなさい、私は君に話したい事があるから」

え？何ですか命令ですか・・・ってかどうしよう、何か面倒なことになりそうだな。

一応そう言われたため俺は。

「・・・・・・はい」

「そうか、よかった」

「で、質問とは何ですか？」

「一応私は君の事を美春から聞いている、まず君には礼を言わなくてわな、ありがとう」

へ？何で俺礼なんか言われなくちゃいけないの？

「えっと、あのその俺は礼の言われる事しましたか？」

「うむ、だって君は中学の頃美春を助けてくれたのだろう？しかも君の言った言葉で美春は武術を習いだして、大会で何回も優勝してるから自慢の娘だよ、そうだったのも君のおかげだから礼を言うのは当たり前だろ

う」

「いや・・・当然のことでした嘛ですから」

「でも、並の人には出来ない事だ、一応私はある会社の社長をしているから人を見る目はあるんだよ、私は君のことを気に入った、娘をよろしく頼む」

「え、あ、はい」

「ってか親公認になっちゃったでしょう、どうしよう、どうしよう・・・・」

「私の話はここまでだ、少しでいいから奈美と遊んでてやってくれないか？」

「あ、はい、その前にトイレ借りますね」

「うん、トイレは右に曲がればあるから」

「はい」

俺はリビングをでてトイレに向かうと、そこに美春のお母さんがいて。

「一つ質問していいかな？」

「何ですか？」

「実は美春と付き合っていないでしょ？」

「何でそんな質問してるんだろう？俺と美春は高校始まってから付き合ってるって設定になってるんじゃないかな？たっけ？まあ一応今日から付き合ってるし。」

「いいえ、付き合ってますけど」

「私の前では嘘つかなくていいから大体のこと知ってるから」

「いいや、本当に付き合ってますよ」

すると驚いたような顔をして。

「え？嘘いつから？」

「今日からです」

「へえ、美春ちゃん告白したんだ」

「俺も一つ聞きたいこと出来たんですけど」

「ん？なに？」

「さっき、大体のこと知ってるっていいましたよね？」

「うん」

「美春がストーカーみたいなことやってるのも知ってました？」

「うん」

うんっておいあなた母親だろ止めさせろよ。

「普通止めません？」

「幸喜くんは、恋する乙女の事がよく分かってないんだよ、恋する乙女を簡単には止められないし、私は美春ちゃんのお母さんだから応援してあげてたよ」

あ……そうですか、何かこの家族すげ……はあ……。

そのあと俺はトイレに言って奈美ちゃんと遊んでいると。

十時頃、俺がさすがに遅いから帰ろうとすると美春が起きてリビングに来た

次回をお楽しみに……

第五話 親公認!!（後書き）

どうも、第五話出させてもらいました。

もしよかつたら感想や評価待ってますよろしくお願いします。

人物紹介2

洋咲美春 身長172

体重??

髪の色黒 目の色微妙に赤っぽい?

幸喜の事が大大好き

成績優秀

弓道部

第六話 料理

~~~~~前回までのあらすじ~~~~~

俺は美春を家に送ると美春が親に俺達は高校始まってから付き合  
つてると言う嘘を言っていた。

そのの嘘を知っていた美春の母親、そして美春がストーカーみた  
いな事をやっていたのも知っていた、しかもストーカーしていた事  
を逆に応援していたらしい。

しかも美春お父さんにも「美春をよろしく頼む」とか言われて。  
何か親公認みたいな感じにもなってしまった。

そして美春が美春の妹の奈美ちゃんとあそんでいると起きてきた。  
~~~~~以上前回までのあらすじ~~~~~

「よ、美春起きたんだ」

その美春は寝癖がたっていて可愛かった。
するとまだ寝ぼけているのか。

「ふみやふみや・・・うん？ええええええ」

なぜかいきなり騒ぎ出した美春を俺は。

「え・・・ちよつとおい大丈夫ぶか？」

俺が近寄ると。

「え？何でこう君がいるの？」

その後美春のお母さんの和美さんが説明して、お姫様抱っこして
来たって言葉を聞いた時美春が「お姫様抱っこ・・・えへへ」
と自分独特の世界に行ったのは見ないことにした。

美春は、俺と奈美ちゃんが遊んでいるのを見て。

「奈美だめだぞこう君は私の物だ」

そう言っ俺の右手に抱きついてきた。

それを見て美春の両親が。

「ラブラブだね~~~~」

それに対して俺は苦笑いしか出来なかった。

さすがに時間がやばいので俺は。

「もう遅いので帰らしてもらいます、だから美春手離してくれないかな？」

「嫌だ、泊まっていけばいいじゃないか」

「そういうわけにもいかないだろ、ほら美春の両親だって困ってるじゃないか」

「いやいや私達は全然okだよ、早く孫の顔も見たいし」

え・・・なんですか？この二人は自分の娘を襲わせたいんですか？・・・

「ほら、だから泊まっていくんだ」

「えつと・・・また今度つてことで」

俺は美春を手から離し逃げるように美春の家をでた。

無事家に帰れた俺は、睡魔が襲ってきて布団でぐっすり寝た。

朝俺は起きると驚くべき光景があった。

「なあああああああああああああああ、お、お前な、何で俺の布団でねてるんだよ」

俺は寝ている美春を起こそうとゆすつてみると。

「う~~~~ん、こう君朝から、だ・い・た・ん」

「は？何いってんだよ、てか何で俺の布団で寝てやがる答えろ」

「だってさこう君に朝ごはんを作ってきたからあげようと思って五時にここに来て、チャイム鳴らしても返事がないから、ドアノブを回してみると開いたから入ったんだよ」

あ~~~~そういえば昨日鍵閉めずに寝ちゃったのか・・・

「おい、てかこれって不法侵入じゃないのかよ？」

「私はこう君の恋人だからいいんだよ・・・いやこう君のお嫁さんかな・・・フフフ」

また、変な妄想に入っちゃったよ・・・。

「それで、どうして俺の布団で寝てたの？」

「うん、恋人同士だけだよ！つこう君が他の女好きになるか分からないから、既成事実作って責任感あるこう君は私と別れられなくしようと……したんだけど、こう君の隣で寝そべってたら、眠くなっちゃって寝ちゃった」

「寝ちゃった」じゃねえよ、じゃあ聞くが俺のこと襲ってねえよな？」

「残念ながら……」

残念ながらじゃねえよ！！

心の中でツツコンで俺は。

「ふう……、ならいいんだ」

美春はバックの中からご飯を出して。

「まあいい、ほらこう君朝ごはん一緒に食べよう」

「ああ、うんいただくよ」

~~~~~約一時間後~~~~~

俺は無事教室にいた、登校時に美春と一緒に行きたいって騒ぎだったが、一緒に登校したりなんかしたら、ファンクラブの奴に殺されると思った俺は、奥の手の「ゆうこと聞いてくれないと嫌いになるよ」そういうと、しぶしぶ「うん」といつてくれた。

「私の愛しのこ・う・き~~~~~」

「ぐふ……」

そう言って抱きついてきたのは可崎愛美裕也かきまなみの姉だったこの人は合うたびに俺に抱きついてくるひどい奴です……けっこう美人だと思うけど……性格がね……高校二年生。

「いてえ……愛美さん何してるんですか」

「愛美さんだなんて、ま・な・み・ってよんでよ……いけず」

「だれが、いけずだ、おい裕也これはどういうことだ？俺に愛美さんを近ずけるな、っていつてるだろう」

裕也は困った顔をして。

「昨日はどうかできたんだけど……今日はとめられなくて……」

「はあゝゝつたく」

「てれないでよ～～～私と幸喜の仲じゃない～～～」

「どういふ仲だよ……」

すると顔を赤くして。

「何って恋人同士じゃない、いや〜ん」

「はあ~~~~ふざけんなよ、俺といつ恋人同士になった？」

「だって、幸喜は私が好きでしょ、私も幸喜が好き、きゅゅゅだ  
から、恋人ど・う・し」

俺が言おうとすると俺がどういふか分かったように。

「もし、「もし」に好きな人がいるならそいつを殺して私が一番になるだけだから」

目が本気にそんな奴いたら殺すって目なんですけど……。

俺は裕也に目で「助けてくれ」そうやると。

「なあ、そろそろ授業始まるから教室に戻りなよ」

すると愛美さんは裕也をにらんで。

「うるさい、私に命令するな、馬鹿裕也」

俺の時とは態度ちがいすぎでしょ……

「ほら本当にそろそろ授業始まるから」

俺がそういふと。

「うん分かった」

素直に従ってくれた。

「何で幸喜の言う事は素直に聞いて俺の言う事は素直に聞いてくれないんだよ」

裕也が不安そうに言うと、  
「またもや愛美さんは裕也をにらんで。」

「**幸喜は特別だから**」

愛美さんはそう言って教室を出て行った。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
昼休み
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

授業が終わり昼休みになった。

するとスピーカーで。

「一年二組の差間幸喜君至急生徒会室まで来てください。」

「おい幸喜何かしでかしたのか？」

和木が俺の顔をみて聞いてくる。

「全然記憶にない、一応生徒会室行って来る」

俺は立ち上がってそのまま生徒会室まで向かった。

生徒会室について。

「差間ですけど入っていいですか？」

俺はノックすると。

「入っていいですよ」

ドアを開けて入ると、美春と美春の横に女の人が立っていた。

すると美春の横に立つてる人が何か思い出したかのように。

「あ、私と会うのは初めてでしたね、私の名前は不動唯ふどうゆいと言います  
生徒会副会長ですよろしくお願いします幸喜君あと、唯ゆいってよんで  
ください」

「よろしくお願いします唯さん、ところでなぜ俺は呼ばれたんです  
か？」

すると、美春が立ち上がって。

「なぜって当然私とお弁当と一緒に食べるために決まってるだろう」  
「決まってるんですか……」。

「ってかそんなことのために校内放送したんですか？」

「だって、生徒会の仕事で生徒会室から唯が出してくれないし、こ  
う君携帯持っていないから……」

ちよつと泣きそうになる美春を見て俺は、美春の頭なでて。

「そっか、分かったじゃあ明日にでも携帯買ってから今度から校内放  
送止めてくれるか？」

「うん」

すると、唯さん驚いたように美春を見て。

「あなた・・・キャラ変わりすぎじゃないですか？」

俺はその言葉に疑問に思っ

「いつもはどんなキャラなんですか？」

「いつもはあまり笑ったりなどせず人に甘えなくてクールって言葉が似合ってる人です」

そうなんだ、美春でそんな感じだったんだ。

その問いに対して俺に抱きついて来て。

「こう君と一緒にいると甘えなくなるんだから仕方ないだろう」  
仕方ないんだ・・・。

「そうですか」

「あのー一つ質問していいですか？」

俺がそういうと唯さんは俺のほうを向いて。

「何ですか？」

「俺と美春の関係知ってるんですか」

「はい、というか生徒会の皆が会長の恋がうまくいくように願って色々協力してますから、もちろん会長がストーカーみたいな行動をとっていたのも知っています」

何で美春の周りの人はストーカーみたいなことやっていたって知ってるくせに止めないんだ、何でだ？

俺はその事を考えていると。

「弁当作ってきたからから食べよう」

美春が笑顔でそういって、俺はその言葉に従って弁当を素直に食べた。

## 第六話 料理（後書き）

### 人物紹介3

可崎裕也 身長175

体重60

髪の色茶髪 目の色黒

姉がいる。

次回は裕也視点でかこうと思います。  
よろしく願います。

## 第七話 悲しい・・・

~~~~~可崎裕也視点~~~~~

突然ですが、俺、可崎裕也は親友の幸喜あだ名でこうが心配です。その理由はなぜかあいつ昨日生徒会長に呼ばれてから変です、マジで。

いつもは授業中よく寝てるのに今日は起きてるし、何か「憂鬱だ」って何回も呟いてため息を何回もついでる、しかも生徒会室に校内放送で呼ばれるだなんて明らかに変だ。

まあ、その理由俺はだいたい知ってるんだけどね。」

そう、俺はこうに生徒会長が告白したの知ってます、そしてこうがしぶしぶokしたのも、なぜかって？その理由は簡単俺は生徒会長に色々相談を受けていたからです。

昼休みが過ぎて、こうは無事に生徒会室まで戻ってきた。

「おい、こう何で呼ばれたんだ？」

大体理由は分かっているけど面白そうだから聞いてみた。

俺が聞いてみると、こうはあせりながら。

「あれだよ、あれ、昨日注意されたじゃんかその説教の続きだよ・・・

・アハハハ」

面白いニヤニヤ

すると、こうが話題を変えるように。

「あ、そうだ、俺携帯買っ事にしたから」

「え？お、お前今なんて言った？携帯買っ・・・は？俺が何回も携帯買えって俺が説得したのに買わなかったのに何でいまさら？」

「え、いや何となくけど・・・」

これも生徒会長のおかげだろうか・・・。

ってか、こうが携帯買ったら、このアドレス張に女子のばっかのるんじゃないのか？

なぜ女子のばっかりのるかと言うと、こうはブツチャケ言ってるもてる、本人は自分の顔は普通だと思ってるらしいけど、この美形だし、よく「めんどくさい」って言ってるけど、危ない時は守ってくれるとかで、かなりの人気だ、本人は知らないみたいだけどファンクラブまであるほど、しかもこうは自分がモテてるなんてちつともきずいてない鈍感野郎だ。

「そっか、まあがんばれよ」

こうは「がんばれよ」の意味がわかんなかったみたいだけど、俺は面白そうだからほうつといた。

~~~~~放課後~~~~~

「幸喜君に可崎君の友達って事で私を紹介してくれないかな？」  
女子一人が話しかけてきた。

放課後になるとよく幸喜に紹介して、って言う依頼がよく来る。  
一応こうに紹介してるけど・・・鈍感だから・・・自分に好意をもってるなんて全然きいてないから、かわいそうなんだよね・・・しかも今こうには彼女いるし・・・。

その後家に帰ると、姉が立っていました・・・しかもかなり怒ってる。

直感的にこれはやばいそう思った。

「ねえ、幸喜は？」

「来てない・・・」

「は？昨日言っただけじゃなかったけ？もし、昨日幸喜に会ったの我慢したら、」

やべ・・・死ぬかも・・・さすがに話題を変えないとヤバイと思ったから、俺は。

「そ、そうだ、こう携帯買いたいだからメルアド分かったら教え

てあえげるからそれで許してください」

俺が土下座で頼むと。

「うん・・・まあいいや、そのかわり絶対メルアド教えるよ、教えなかったら本気で殺すからな・・・」

「うん・・・分かった」

この会話を聞いてて分かると思うけど、姉は俺とこの扱いが全然ちがうこの前では、甘えたりしてるけど、俺の前では怒りまくってる・・・。

俺は昔姉に「本当にこの事すきなのか？」と聞いた事があった。

「もちろん、だから、幸喜と私が恋人同士になれるように手助けしなさいよ・・・しなかったら殺す」

そう言われ本当に好きなんだ~~~~って感心した。

けど・・・俺は生徒会長の方を手助けしちゃったんだよな（ゝ

ゝ）アハハ・・・ばれたら死ぬな・・・。

俺はばれないようにうまくやってみせると、心に誓った。

~~~~翌日~~~~

俺は昨日こうに紹介してって頼まれた女子をこうに紹介した。

こっちは表情からして、この女子がこうに好意をもってるなんて全然きずいてる様子いないみたい・・・。

紹介するといつもこっちは決まって、「お前本当に女子の友達多いな・・・」

あきれた顔をして言うてくる、全部はお前のせいなのに・・・。

俺って本当にいい奴だよな・・・そのおかげで彼女がいない・

・・・むしろに悲しくなる、可崎裕也でした・・・。

くそ~~~~~彼女欲しい~~~~~グス悲しい・

・・・

第七話 悲しい・・・（後書き）

人物紹介 4

堂本和木 身長 169

体重 51

女装したら普通に女の子に見える。

人物紹介 5

崎山義正 身長 176

体重 63

いじられやく、美春ファンクラブ会員。

この二人はまだ一話にしか出てないんでもう少し出番増やそうと思います・・・多分。

読んでくれた人ありがとうございます、もしよかったらこれから
も読んでください。

第八話 助けてくれ

~~~~~ 前回までのあらすじ~~~~~

俺、差間幸喜は携帯を買った事になりました  
以上短いけど前回までのあらすじ終わり。

~~~~~ 幸喜視点~~~~~

~~~~~ 放課後~~~~~

俺は今携帯を買いに商店街をプラプラ歩いています。

美春が「私も行くぞ」って言って騒いでたけど、もし俺が美春と一緒に商店街なんか歩いたら学校で殺されるら何とか説得してついてこないでもらった。

「よ、こう何してんの？」

そう言って話かけてきたのは、義正だった。

「お、ちようどいい時に、なあ携帯の買い方教えてくんねえ？」

「え〜〜めんどくさいからやだ」

「そつか・・・はあ〜〜これだけはしたくなかったんだけどな、お前の秘密ここで大声で叫んでいいか？」

「ハハハ、な、何を言っているんだよ、ハハハ」

すげ〜〜目がキョロキョロしてるこれって拳動不審って奴だよな、

おもしれ〜、まあ大声で叫んでみるか。

「あれは、義正が中学生の時「あああああああああ、分かったからうん、携帯買うの手伝ってあげるから」

「そうかならいんだよ、アハハハハハ」

「てか、何でお前知ってるんだ？」

「和木に聞いた、ほら案内しろ」

俺はそう言つてとぼとぼ歩いていく義正の後を追つて、無事携帯を買えました♪

その後携帯を買い終えた俺は、義正と別れて家に行くと、家の明かりがついる・・・泥棒か？・・・どうしょ・・・そ、そうだよ電気消し忘れたんだよ、アハハハ馬鹿だな俺。

俺はドアに手をかけ回してみると開いてる・・・あけてみると。

「こつ君〜〜〜〜〜お帰り」

いきなり美春が抱きついて来た。

「はあ〜美春か・・・って何でお前が俺の家にいるんだよ」

すると美春はポッケから鍵を取り出して。

「合鍵を作つといたんだ」

俺合鍵作つていいなんて許可した覚えねえぞ、ようするに無断で

作ったってことか………ってつかおい、それって犯罪じゃねえか？ま、いいけどさ………。

「そっか、まあいいや、で俺の家で何してるの？」

「何をつて、ご飯作っていたのだ、それと携帯買ったのか？」

俺はバックの中から携帯を出して。

「ほら、買ったよ」

すると美春は携帯を出して、赤外線で、メアドを交換した。

「これでokだ、毎日メールするから覚悟しといてね」

「ああ、分かった」

俺は携帯をベットのの上に投げて、美春がご飯をテーブルにおいてるのをボーッと眺めていると。

「ねえゆう君知ってるか？明日学校で全校生徒対抗のゲーム大会やるんだよ、それでビリになった人は皆の言う事聞くなって罰ゲームがあるんだ、でも一位の人は豪華料理が食べられるんだって」

「え………う、嘘へ、へえ……そ、そうなんだ今回はゲーム大会か、学校でゲームはよくないと思うな……よくそんなの先生方が許したね……」

「先生方は一ヶ月に一度ある、こういうイベントを楽しみにしてるから、むしろ協力してくれてるよ」

実はこの学校は一ヶ月に一度イベントがある例えば今回のゲーム大会や、前はクラス対抗の野球大会などがある。

理由を校長先生や理事長に前聞いた事があつたけど答えは「面白そうだから」らしい、前はさそれなりに楽しませてもらったけど今回はやばいかも……。

実は俺ゲーム苦手なんだよ……まあ、ビリにはならないだろう……そうだよポジティブに考えるんだ俺。

その時の俺はきずいてなかったこのゲーム大会は美春と裕也が仕組んだ事だった事を……。

~~~~翌朝~~~~

「みなさん~~ゲーム大会始めま~~す」

生徒会の佐藤氷見さんがマイクを使つていうと。

「おお~~~~」全校生徒（幸喜）以外が大声で騒ぎ出した。

俺は、今日ずる休みしようとしたのに……裕也と和木と義正に連れて行かれてこの大会に無理やり出る事になった……くそ~~俺は何度も逃げ出そうとしたのに行く先々に生徒会の人や裕也と和木と義正が必ずいるんだよ……何でさグス……これほど友達を憎んだ事はなかったよ、バカヤロ~~~~。

結局大会でビリになりました……はい……こうなるとは分かってましたよ、でもひどいよ皆のバカヤロ~~~~。

何か女子は変な笑顔浮かべてるし、男子は変なオーラ出してるし誰か助けて~~~~。

このまま次回に続きます。

幸喜「え？続くの？」

作者「そりゃそうだよ、面白そうだから」

幸喜「ばかやろー」

そう言って幸喜は夕日に向かって走っていきました……。

次回幸喜にいろんな人があんなことやこんなことをお願いします。

（本当にそうするかは未定です）次回こつこ期待。

第八話 助けてくれ〜（後書き）

人物紹介6

可崎愛美 身長170

体重??

髪の色黒 目の色黒

可崎裕也の姉で幸喜の事が好き。
結構モテる。

第九話 絶対泣かす!!

~~~~~前回までのあらすじ~~~~~

俺、差間幸喜は、携帯を買いました~~~~~、ここまではよかったんだけど。

次の日になんと学校でゲーム大会が始まってしまった、結果ゲームが苦手な俺は負けてしまい罰ゲームで今日一日出来る限り皆の言う事を聞かなければいけなくなってしまった。

誰か~~~~~助けて~~~~~

~~~~~以上前回までのあらすじ終了~~~~~

昼休み、俺は罰ゲームで、皆さんに色々な命令をされています・・。

例えば「お姉ちゃんって呼んで」「好きだよって言うて」などあげくのはてに男子から「お兄ちゃんって呼んで」など変質者が色々言ってきましたよ・・・・・てかこの学校変質者多すぎるんだよ、まあ生徒会長がストーカーだからね・・・・・ってか男子が「お兄ちゃんって呼んで」はさすがに引くよ・・・うんほんとに皆さんもそう思うでしょ?。

俺は一人でいたかったため屋上で弁当を食べていると、美春からメールが来た、内容は。

一緒に弁当食べたいから生徒会室に来い

どうせ行ったら変な命令されるに決まってるから俺は、そのメー

ルを見なかった事にしました。

すると屋上のドアがバタンと鳴って開いた。

「こう君なぜ生徒会室にこない」

ってかまだメール来て五分とたつてないんですけど……

「あははは………なんでだろう」

「まあ、ここは人がいないからちようどいいな、今週の土曜日デートしよう、一つ言っけど拒否は出来ないからな、いま君は罰ゲーム中だからな」

「え？そんな事かいいよ」

すると美春は驚いたような顔をして。

「へ？いいの？」

「当然じゃん、断るわけねえよ、俺達は付き合ってるんだからいつでも言ってくれよ」

「そつか、そうだよね……ならこの大会意味なかったなせつか
くこう君が苦手なゲーム大会にしたのに……」

え、まさか、このためにこいつは、ゲーム大会にしたのかよ、はあ……何か俺美春と付き合い始めてからため息ばっかついてる気がするよ………ほんとに……。

「はあ、俺はそのせいで色々な人にいろんな命令されたんだぞ、

「つたく、まあいいや分かった土曜日デートね」

「うん、初デートだ、土曜日が待ちどろしいな、うんうん」、じゃあ生徒会の用事があるから、先に生徒会室行ってくるから、早く生徒会室にきてね」

「ああ、分かった」

そう言つと美春は鼻歌を歌いながら、屋上を後にした。

まさかな、デートするだけなのに、あそこまで上機嫌になるとは思わなかったな……。

俺は屋上を後にして生徒会質に向かおうとすると、裕也が突然。

「なあ、こう、今週の日曜、姉貴とデートしてくれないかな？」

「は？ふざけんな、いやだ絶対やだ」

「こんな事はしたくなっただけだな……」

すると裕也はポツケの中から録音機を出して、再生すると、俺が無理やり言われた、お姉ちゃんや、大好きや、お兄ちゃんなど、自分で言ったのが恥ずかしいような事が録音されていた、くそもしタイムスリップ出来るなら「お姉ちゃん」とか言ってる自分を殴り飛ばしたいよ。

「でさ、これを校内放送で流されて欲しくなかったら、姉貴とデートしてあげてくれないかな？」

「ああ、はいはいわかったよ、その代わりちゃんとデートしてやつ

たら、その録音機よこせよ」

「わかってるよ、悪いな、姉貴がうるさいからさ、じゃあ多分放課後に姉貴がこうをデートに誘うと思うからよろしくな」

そう言っただけで裕也のクソ野郎は去って行った。

くそ、俺愛美さん苦手なの知ってるくせに、絶対録音機取替えしたら、裕也のクソあほボケかす野郎を何回も殴ってやる、覚悟しとけよ。

その後生徒会室に着いた俺は、美春と付き合ってるんだから、隠し事はいけないと思って、日曜、愛美さんとデートする事をつけると、なんと美春はその事を知っていた。

なぜ知っているか聞くと、もともと裕也は俺と美春が付き合っている事を知っているらしく、美春が俺の事をデートに誘いたかったため、裕也に相談した結果、デートを出来る方法を教える代わりに、愛美さんも俺とデートしていいかと、条件を出されて、しぶしぶokしたらしい。

その、会話を聞いた俺はマジで裕也を殺したくなりました」。

~~~~~放課後~~~~~

「ゆ・う・や~~~~デートしよう」

とうとう来てしまった……愛美さんが……愛美さんの後ろにいる裕也に奴が録音機をチラチラ見せやがって。

「……………はい、いいですよ」

突然驚いた顔になって。

ってか、なんでさ俺がデートokすると皆驚く顔になるんだよ。

「うそ……ねえ馬鹿裕也、これって夢じゃないよね？」

「はいはい、夢じゃないよ」

（ってか馬鹿裕也ってないでしょ、一応俺あなたの弟なんですよ〜）

裕也がそういうと、愛美さんは俺に抱きついてきて。

「ウフフフ、やった♪」

的な感じではしゃぎまくっていました……………。

はあ〜〜〜〜マジで憂鬱だよ…………裕也絶対泣かす、そう心に誓う差間裕也でした。

## 第九話 絶対泣かす!! (後書き)

人物紹介 7

洋咲和美 身長 169

体重? ?

性別 女

美春の母親

人物紹介 8

洋咲和木 身長 181

体重 73

性別 男

美春の父親

次回幸喜のデートが始まりますお楽しみに

## 第十話 美春とデート

~~~~~前回までのあらすじ~~~~~

俺、差間幸喜は、デートする事になりました……。

ついでに裕也の事が憎くなりました♪

今月のお金大丈夫かな。

~~~~~土曜日~~~~~

とうとう土曜日になりました〜。

美春のお願いでデートプランは俺が決めることになった。

午後一時俺が駅前に行くと、すでに美春は待っていた、おかしいな今十二時半なのに……。どんだけ早く来たんだよ。

「よ、待たせちゃったみたいだな」

すると、美春は突然声をかけられたのが驚いたみたいで、驚いた顔をして。

「え？あ、いいや私の方が早く来ちゃっただけだから、気にすることはない」

何か慌てた、美春を見ると無性に可愛く見えた。

俺は美春の頭をなでながら。

「美春って可愛いよね〜」

そう言うと、美春は顔を思いつきり赤くして。

「そ、そんな、こ、事ない」

美春はものすごくどうしようしていた、美春を見てものすごくからかいたくなっただけ、止めといた。

「よし、じゃあデートしに行くか」

「うん」

そう言って美春は俺の腕に美春の腕を絡めて来た、さすがに俺も照れたけど、デートだからそのまま駅の方まで歩いていった。

俺達は電車に乗って、五個離れた駅に向かった、なぜ五個に離れた駅に向かった理由は簡単だった、まず第一に同じ高校の人には会わないと思ったから、第二に映画館やショッピングモールなどデートにはちょうどいい環境だったからであった。

電車に乗ってる時も美春はご機嫌だった、理由を聞いたら「こう君とデートだから嬉しいわけない」らしい、さすがにそういわれると照れるので話題を変えて話していると、電車は目的の駅に着いた。

「よし、映画でも見るか」

俺がそういうと、美春はコクって頷いて俺に腕を絡めたままついて来た。

「何みたい？」

すると、彼女は看板の方を指指して。

「これ、見てみたい」

彼女が指指したのは恋愛物の映画だった、俺はちょっと意外に思った、何か美春はアクション系の映画が好きなんじゃないのかなと思っていた。

てか、よく記憶を思い出してみたら、美春の部屋に上がったとき恋愛物のDVDが置いてあったなと思い出して、恋愛物が好きだったんだと、確信した。

「美春って恋愛物の映画って好きなの？」

俺は確信していたけど一応聞いてみた。

「えっと、うん好き」

「やっぱり美春の部屋に入った時恋愛物のDVDあったからね」

すると、美春は慌てて。

「え・・・その、なんと云つか私の部屋入ったのか？」

「あたりまえだろ、俺の家で寝てた美春を、美春の部屋まで運んだのは俺なんだから」

「そっか・・・何か見たか？」

うーん、俺の顔写真が貼ってあった抱き枕を見たなんて言ったら何かめんどくさそうだから、「とりあえず、映画始まつちゃうから見よ」俺はそう言ってごまかした。

約二時間後

「面白かったな」

「うん、面白かった♪」

「そっかならいいんだ」

「この後どうするんだ？」

「えつと・・・言いにくいんだけど、この後まだ考えてないんだよね・・・」

そうなんです、俺デート初めてだから悩んでたら今日になっちゃったんです・・。

すると美春は笑顔になって。

「うん、そうだった、だから私が後のプラン決めてあるから安心しろ」

「……俺ってそこまで信用ない？……」

美春は必死に手を振つて。

「ちがうよ、だってこう君の家に行くたびにデートコースの雑誌とが増えてたから、一応考えとこうって思ってた・・・その」

俺は美春の頭をなでて。

「そっか、ありがとうな」

「うん、じゃあカラオケ行こう」

俺は美春に腕を引つ張られながらついていった。

カラオケに着いて最初は一緒に歌った、その後美春が一人で歌った、すげーうまかった、うんマジで。

三時間くらいカラオケで歌った、大体今の時間は六時頃。

美春の両親が俺に会いたいみたいで美春の家に行く事になった。

「ところでさ、こう君私の部屋に入ってたんだよね？」

「うん、そうだけど」

「変なもの見なかったか？」

変なもの？やっぱり、俺の顔写真が貼ってあった抱き枕だろうか・

・素直に言うべきか、言わないべきか・・・どうしよ。

「ねえ、見たの？見なかったの」

「えっと、・・・俺の顔写真が貼ってある抱き枕を見た・・・」

「ねえ、私の事嫌わないのか？・・・そんなの見て」

美春は俺に抱き枕の事を知られたくないみたいで今にも泣きそうな顔をして俺に聞いてきた。

俺はその美春を見て笑顔で。

「そんな事で嫌うなら、今デートしてねえよ」

「そっか、ありがとう、こっ君の事大好きだからね」

安心したのか笑顔になって、俺に抱きついてきた。

そのまま、美春の家に着いた、俺に抱きついたままの美春を見て美春のお母さんに、数分からかわれた。

俺は美春のお母さんが作ったご飯を食べて、美春の部屋で、話していると、結構時間が経っていたから、美春に帰るね、って言うて帰ろうとすると、美春が俺の手を掴んできた。

「その、何ていうか・・・」

美春の顔がどんどん赤くなっていった。

俺は自覚がなかったが、いつのまにか俺が春にキスをしていた、俺は慌てて美春から口を離れた、多分俺今かなり顔赤いだろうな・・・美春は驚いた表情で俺を見て、泣き始めた。

「え、っちょおいどうした、やっぱり、その俺とキスするの嫌だっ

たか？」

美春は涙を流しながらも笑顔になって。

「違うの、嬉しいんだ、こう君からキスしてくれて」

俺はポッケに美春に似合うと思ったから買った、指輪があるの思い出した。

「そっか、美春にプレゼントあるんだ忘れてた」

俺は手をポッケに入れて、美春に指輪を渡した。

「え……いいの？」

「ああ、前美春に似合うと思って買ったんだ、でも安物だぞいいのか？」

「うん、嬉しい、本当にありがとう」

その笑顔を見て少しドツキとしてしまった。

「あ、ああじゃあ俺帰るな」

俺はそう言って美春の家を慌てて出て、家に着きベットに横になって、俺もしかしたら美春のこと好きになり始めてるのかも知れない、と思ってる自分がいた。



## 第十話 美春とデート（後書き）

### 人物紹介

不動 唯 身長160

体重??

性別 女

その他 生徒会副会長

幸喜が美春の事が好きになってきました♪

今回は美春視点で、幸喜とのデートの様子を書こうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5626f/>

---

俺の彼女はストーカー

2010年10月8日12時22分発行